

20.5.24(日). 復活節第7主日

「キリストという礎石」

大阪大道教会牧師 森岡高康

先週21日(木)に大阪・兵庫・京都の関西3府県において緊急事態宣言が解除となり、4日目の朝を迎えています。皆さんお元気でしょうか？相変わらず市中にウィルスが残っていることには変わりませんが、先週末より多くの人々が元の日常を取り戻しつつあることは朗報と言えます。多くの子どもたちや学生の皆さんにとっては、学校が完全に再開するまで、未だもどかしい日々が続いていると思いますが、神様からの励ましを与えられ、残りの自粛期間が新学期のための良き備えの時でありますようにお祈りしています。

さて、本日の聖書箇所は先週に続くIコリント書3章の後半部分、10節から23節までとなります。前回の3章の前半部分においては、教会を「神の畑」になぞらえて、互いに協力して神様と隣人のために力を合わせて働くことの大切さについて述べられていました。「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させてくださったのは神です。」(6節)とありますように、宣教活動における役割分担の重要性と共に、根本である大地の役目を担っておられる神様の存在について覚えることが出来ました。今日の場面においては、教会が「神の建物」になぞらえて書かれています。パウロは先ず、神の恵みに感謝し、主は私にどうしたら腕の良い建築家になれるかを教えて下さったと告げています。そして、パウロが築き上げた土台の上に、アポロが建物を建てたことに触れた上で、土台の上に建物を建てる者には細心の注意力が必要であると述べています。また、私たちがすでに得ている本物の土台である主イエス以外に代わりの土台を据えることなど誰にも出来ない(11節)と語っています。続く12節には、その土台の上にどのような素材を使って建ててゆくかが重要であると述べており、様々な材料が列挙されています。「金、銀、宝石、木、草、わら」と色々な素材が挙げられていますが、主イエスという土台に相応しい素材は「木、草、わら」ではなく、「金、銀、宝石」であることを教えています。パウロは建物を建て上げるために単に高価な素材を用いるようにと言っている訳ではなく、建造物の頑強さや耐久性に目を留めるように言っているように思います。現代の私たちにとっては、幼少期に目にした3匹の子豚の絵本に描かれた、あの物語を思い起こす人も多いのではないのでしょうか？物語の最初に登場する怠け者の子豚(長男)は、その辺にあったわらで手早く家を造り、その後、二番目の子豚(次男)も、めんどくさがって身近にあった木を使って自分の家を完成させました。一方で、三番目の子豚(末っ子)は大変慎重な性格であったのか、すでに完成した家で長男と次男が遊び暮らしている間も、せっせとレンガを積み重ね、時間と労力を惜しむことなく、レンガ製の家を完成させました。そんなある日のこと、子豚たちの住む家の前の野原に、牙を剥き、よだれを垂らす凶暴な狼が登場します。狼はわらで作った長男の家を見ると、大きな息を吹きかけて、たちまち家ごと吹き飛ばし、家を無くした長男は大慌てで次男の家へと駆け込みます。続いて狼は、長男が逃げ込んだ次男の家の前に来て、またもや大きな息を吹きかけ、木製の家も、もろくもなぎ倒され、二人は最後の砦とも言える末っ子の家へと命からがら逃げ込みます。その家は頑丈なレンガ製の家でありましたので、狼が目一杯息を吹いたところで、ピクともしませんでした。最終的には、狼が煙突の上から侵入することを想定した子豚たちは、煙突につながる暖炉に火を起こし、熱湯の入った大鍋に、まんまと飛び込んだ狼は大慌てでしっぽを巻いて退散します。こうして3匹の子豚たちは、レンガ製の家でいつまでも幸せに暮らすという物語であります。

この誰もが知っている3匹の子豚の物語は、あらゆる事態を想定して、万全の備えをすることを教訓と

する童話と言えますが、「木・草・わら」で作られた建物が、もろく崩れやすい建造物であることを私たちに教えてくれます。けれども、この所でパウロが神の建物を造るにあたり、素材を大別する基準としているものは、頑丈さという言うよりも、むしろ耐火の度合であるように思います。つまり、神の建物に用いる素材が火に耐えうるか否かという点であります。「…なぜなら、かの日が火と共に現れ、その火はおのこの仕事が進むものであるかを吟味するからです。」(13節)とあるように、やがて各々に神様による報いがあると告げています。パウロはキリストという土台の上に適切な材料(金、銀、宝石)を用いて建て上げた人は、建物がしっかりと残るので確かな報いを受けることになるが、その一方で不適切な材料(木、草、わら)を使って家を建て、やがて家が焼けてしまった人は、大きな損害を被ることになると語っています。ただその人自身は、火の中をくぐり抜けるように命からがら救われると告げています(15節)。では私たち真の神様を信じる一人一人にとって、「金、銀、宝石」とは何を意味しているものでありましょうか？それはいつまでも続くものであり、普遍的なものであります。パウロは同じIコリント書の「愛の章」と呼ばれる13章の中で、「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。」(口語訳、13章13節)と告げています。つまり、パウロはキリストを礎石とする教会は、アガペーの愛(神の愛)によって建て上げられなければならないと教えているのであります。聖書の数あるたとえ話の中でも主イエスの私たちに対するご愛が最も色濃く描かれているのは、やはり放蕩息子のたとえ話ではないでしょうか(ルカ伝15章11～32節)。父親から受けた大切な財産を湯水のごとく使い果たした弟息子の憐れな姿は、私たち神様から離れた人間の姿を表しています。もらう物をもらって、そそくさと遠い国へと旅立ち、すっからかんになった弟息子に突如襲いかかったのは大規模な飢饉でありました。その日暮らしたとなった彼は食べる物にも事欠き、豚の世話をして生活する中、豚のえさであるいなご豆さえ食べたい心境でありましたが、誰一人、恵んでくれる者はいませんでした。そのようなどん底の状態に落ちた時、彼は初めて自分自身の真の姿に気付かされ、「そうだ。父の許へ帰ろう！」と決意したのであります。実家へと向かう帰り道、父に合わせる顔もなく、遠く離れた所から家の方向を見つめた時、家の前に立っていたのは、父の姿でありました。父は弟息子と分かるや、すぐに走り寄って彼を抱きしめ、口づけをしたのであります。「…私はもうあなたの息子と呼ばれる資格はありません。」と泣いて謝る彼に向かって、父は一切咎めることなく、新しい服と靴を与え、召使いたちに祝宴の準備をするように告げたのであります。「死んだものとあきらめていた息子が生き返り、行方の知らなかった私の息子が帰って来たのだから。」というのが父の思いであり、無条件で彼の帰宅を喜び、受け入れたのであります。この主イエスが語られた放蕩息子のたとえ話は、神様の許から離れてしまった私たち一人一人が、どれほど大きな愛によって神様に愛され、包み込まれているかということを今の私たちに教えてくれるものであります。使徒パウロはコリント教会の信徒たち一人一人に向かって、神の建物である教会の土台は十字架に示された神の愛であり、そのキリストの愛以外の土台を据えることは出来ないと告げています。

ひと月と2週間程の長い長い自粛生活を経て、来週の31日(日)にはペンテコステを迎えようとしています。主を信じる私たちの心の中に神の霊が注がれた聖霊降臨日であり、教会の誕生日とも言える記念すべき日であります。目に見えないウィルスの脅威によって、人々の肉体のみならず、私たちの心をも蝕み、差別や偏見の眼差しが広がることのないように、切に祈るものであります。神の霊による雨が人々の乾き切った心を潤し、不安や恐れが取り除かれ、開かれた新たな世界がもたらされますように。寄る辺のない多くの人々の上に神様の恵みの雨が降り注がれ、生きる勇気と望みが与えられますように、共に祈りたいと思います。